



# 〈資料〉貨幣の本質 : リーフマン「貨幣と金」第五章 第一節及第二節

増井, 光藏

---

(Citation)

経済学商业学国民经济杂志, 32(6):969-984

(Issue Date)

1922-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00053444>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053444>



## 貨幣の本質

リーフマン「貨幣と金」第五章  
第一節及第二節

商學士 增井光藏

### 一、「貨幣」と一般的計算單位

既に知る通り貨幣の「價值」即ち費用財としての之れが評價は元より凡ゆる價值凡ゆる評價と同じく謂はゞ全く個人的のものであつて其使用し得る量即ち所得によつて定まる。こゝに貨幣價值の純個人的特質が謂ひ現はされてゐる。蓋し貨幣は先づ營利經濟が之れを獲得しそれによつて營利行爲の背後にある消費經濟が凡ゆる自己の慾望の充足を可能ならしめる處の價格と云ふものに移り行く外は一般に何等の目的をも持たないものである。若し貨幣のないときは消費經濟では其慾望満足のために自ら勞働するか或

は物々交換ならば自己の生産したる財を直接に提供せねばならぬ。

然しながら以上の如くに貨幣の經濟內在的職能を考察すると此處に之の當り次の問題が生ずる、即ち然らば斯の如くして消費經濟の費用單位となるものが實際上貨幣であるかどうか。それは貨幣でのみ謂ひ現はされた所得であることは疑のない處である。然しながら——更に論者は斯く問ふに相違ない——所得は今日實際上貨幣であるかどうか。即ち凡ての所得の大部分否ならぬは最大部分が「貨幣に於て」のみ計算せられるだけで、たい銀行にある預金として現はれ、實際上は貨幣形態では全く現れないか或はほんの一部分だけ現はれるのではあるまいか。そしてそれが本當であるならば、再言すれば實際上は所得の最大部分は決して國家的支拂要具の形態をもたず、却つて専ら計算的な大きさであるならば、貨幣の購買力は一方は金によつて（金屬主義學說）他方は國家によつて（章券主義

學説) 決定せらるゝなど、主張する様な恐ろしく重大な意味を何うして國家的支拂要具に與へることが出來やうか。

此の中に現はれてゐる誤謬は經濟學の沿革即ち國富と云ふ出發點及び常に之れと關連する數量的唯物論的經濟思想によらねば説明のつかぬもので、尙ほ今日でも極めて普く行はれてゐる處である。

所得が「貨幣價值決定基礎」であるとしても尙ほ世人は一般に所得の幾何が現金の形で現はれてゐるかを一度は氣にする。然し之れは高々勞働者の賃銀及び小農工商業者の手取金の範圍であつて、然もそれは常に所得ではなくて單に總收益たるに過ぎないものである、そして彼等が自己の慾望充足のために使ひ得る實收所得は元より決して一定の貨幣額の形で現はれない。其他凡ての所得は概して銀行勘定の貸方を通じて初めて其回收者の手に這入つて來る。然しながら又、極めて小さき營利經濟の場合にも之れに

よつて計算を營み且つ之れを自己の消費經濟の根據としてゐる様な所得は、其營利經濟が賣場或は仕事場で自己の營利行爲の結果として受取る處の數額とは全く異つたものである。然しながら消費經濟の支出は尙ほ多額は現金で行はれてゐる。此場合に於ても其最も大なる支拂即ち家賃の支拂は必ず今日迄に愈々盛んなる發展を遂げた振替勘定、小切手勘定によつて常に決済せられてゐる。

それ故に所得は貨幣額であると云ふことは全く本當ではない。所得の大部分は決して貨幣ではなかつた。それは貨幣單位に於ける計算額、即ち貨幣を根據とする計算單位で呼ばれる要求權の使用能力であるに過ぎない。獨逸國民が年々所得として獲得し自己の消費のために使ふ處の幾千萬マルク——或る人は之れを四億マルクと計算した——の内で實際に國際的支拂要具の形で所得となつた部分は段々少くなるばかりである。然しながら「ペニツヒを以て計算する」様

な極めて貧しい消費經濟に於てすら實際は銅錢で以て計算するのではなくて、寧ろ、抽象的な計算單位で計算するのである。即ち貨幣で計算するのでなく、價格で計算するのだと云ひ變へてもよろしい。價格はたゞに支拂はれたる貨幣額であるのみならず、多數の場合には寧ろ抽象的の計算の大小即ち經濟計算に於ける算定されたる要素である。蓋し經濟を營むことは決して生産することではなく計算することである。然も其計算は一種の處分であつて即ち豫期されたる抽象的な大きさを以てする先慮的の計算である而して日傭労働者は彼れが一年を通じて且つ其他の無數の支出をも考へて一年中に一度は一足の長靴のために使はねばならぬ二十マルクを計算する。約言すると經濟者は貨幣に於て計算せずして自己の所得を以て計算する、そして其所得は貨幣に於て成立つていない抽象的な計算單位で表現せられ純形式的に其購買力を意味するものである。

故に貨幣が財を買ふのではなくて、所得が之を買ふのであると謂つてよろしい。私は此提言を以て最も重要な認識の一つと考へてゐる。その經濟上の意味及び適用を正しく理解する爲には恐らく私の心理的經濟理論によるの外はありまい。經濟學者の中には恐らくは此事を既に知つて居つたと主張せんと欲するものがあるだらう。然らば何故に此認識よりして更に其以上の適用を試みなかつたのであるかと反問したい。即ち金屬主義者は此認識を極めて簡單に葬つて仕舞つた、そして其結果は所得論及び價格論のために即ちもつと端的に云へば通説の最も大なる誤謬の若干を驅除するために如何ばかりの新らしい斷案を齎らし得ただらうか。然し最初に此事を認めて、所得が「貨幣價值決定原因」であることを強く主張したツウイードネツクすら其認識から何等の斷定的推論をなさず徒らに金屬主義と名目主義との間を彷徨してゐる。これ迄に貨幣を以て現實の支拂要具とは異なるあるも

のと解釋し、斯の如き思想に對して經濟理論と云ふ手段を以て——それが舊來のものなると自己固有のものなるとを問はず——一個の系統ある論據——當然其處まで來るべき筈のものであるが——を示してくれた人あるを私は聞いたことがない。私は争ふべからざる權利を以て私の貨幣理論を私の經濟思想全體と同じく私だけに屬する精神的所有物であると主張してよい筈である。元より其處此處の誰人か、此の點彼の點と部分的には主張したかもしれぬ、然し私のは之れを引きくるめて理論的に根據を與へたのである。故に若し嘗て理論的に著作をしたことのない人達が既に此等の凡てのことを知つて居つたのだと云ふが如き口物を洩らすならば、然らば何故に其智識を書物に書いて置かなかつたかと反問せられても仕方があるまい。そうして置けば先生方は今頃は恐らく學界の名聲を集めることが出來たらうに！咄！

私が所得は財を購ふものであると云ふ場合に

は所得として消費經濟に流れ込んでゆく營利經濟の貨幣純収益と消費經濟が之れで以て買入れる享樂財とのことを考へてゐるのである。費用財は營利經濟からも亦其財産の内の貨幣資本と呼ばれる部分で以て買入られる。然しながら其額は既に注意した通り、消費經濟の支出に比べれば貨幣、即ち現實の支拂要具では甚だ少いのである。そして、營利經濟の斯の如き費用ではなくて、所得の最少限即ち凡ゆる重要な享樂財の從來の價格と關係をもちながら、消費經濟に對して文化狀態に相應する生活維持を可能ならしむべき消費基金、これが價格構成（交換經濟的限界収益）の決定原因である、即ち與へられたる要素である。

從て、多數の所得及び殊に大なる所得は決して貨幣でなく純粹に計算し得べき大きさ即ち極めて多種類の要求權及び債權の履行權である。然しながら毎日三マルクの日給を得る勞働者の場合に果して此三マルク位のものが彼れの慾望充

足の根底であらうか。否、彼れは此三マルクを以て計算せず、彼れの所得年額或は尠くとも所得月額を以て計算する。即ち彼れは彼れの所得年額全體を根據として且つこれ迄からの凡ての慾望に基いて毎年一回、六十乃至七十マルクで着物を二十マルク内外で一足の靴を買ひ得る事を知つてゐる、そして此等の支出を其外の諸支出例へば住宅費等の中で一年を通じての上で計算する、言ひ換へると彼れは貨幣即ち彼れの日々の賃銀を以て計算せずに彼れの總體の所得を以て計算するのである。何人も費用計算の場合に自己の所得が錢の形であるかないか、或は孰れの種類の錢であるか、又、其時丁度ポケットに這入つてゐる金額を如何に使ふかと云ふことを問題にする譯ではない。價格は何人に取つても錢ではない、それはある抽象的なる計算單位での表現であつて、之れに對して各人が自己の所得に應じて費用として異つた評價をするものである。個人的の交換取引を營むに至る久しい以

前には各經濟者は抽象的計算單位で表現せられてゐる所得分について利用及費用の計算を行つて居つた。けれども物財生産即ち器械或は田野に於てする勞働者の技術的活動を經濟であると考へた舊來の經濟思想では元より此事實を認識することは出来なかつた。

從て人々が貨幣の事を談ずる極めて多數の場合に於ても價格が其數量によつてのみ左右さるべき現實の支拂要具のことを少しも考へず却て全經濟計畫の規模に準じて諸種の慾望に對して使用し得る自己の所得及び所得部分のことを考へてゐる。今私が百マルクで新しい着物を買ふべきものか否かと自ら尋ねると私の所得は意の儘に多くの着物を買ひ然も同時に其他凡ての慾望をも充足することを許してくれないから此場合に私は貨幣及び錢のことを考へてゐるのでなくて、此百マルクと云ふものが私の總體の所得の内得部分として如何なる役目を演ずるかと云ふことを考へてゐる。然し乍ら此所得及

び此所得部分は一般的計算單位に於て表現せられたる全く抽象的の大きさであつて貨幣も亦其計算單位でのみ呼ばれ之れに對しては各人は自己の所得に應じて異つた評價をするものである。

此人は澤山貨幣をもつてゐると人が云ふ場合には國家的支拂要具のことを考へてゐるのでなく、其人の財産の事を考へてゐる然も異種の物財の總計としての財産ではなく、此場合の財産も亦凡ゆる今日の經濟上の概念と均しく一つの貨幣表現、即ち凡ゆる物的所有物及び凡ゆる要求權の算出された價格が一個の數額に總括される様な貨幣計算に於ける表現である。此人は澤山貨幣を儲ける、と云ふ場合にはいつでも國家的支拂要具のことを考へて居らず、寧ろ錢に於ては全く抽象的計算單位に於ける其人の所得のことを考へてゐる。貨幣資本、貨幣市場等のことを云々する場合も、又其の通りである。

如上の見解に對しては恐らくは貨幣は所得に對して論理的第一者であるとの攻撃をするかも

知れぬ。然し此れは當つて居らぬ。吾々の意味に於ける貨幣即ち抽象的計算單位てふ寫象は經濟者が物財及び現實の交換要具を以て費用として經濟するかわりに、所得部分を以て自己の消費經濟に於ける費用として計算することを漸く覺えるに至ると共に次第に出來上つたものである。此れによつて、即ち所得の概念から又特に全く個人心理的經過から初めて徐々に抽象的計算單位の一般的活用が貨幣として發展して來たのである。決して神秘的な「社會的規則」に基いては無い。

それ故に「貨幣」と云ふ言葉は日常生活の用語例では明かに極めて雑多の意味に使はれてゐる日常生活で貨幣を云々する場合には百中九十迄恐らくは尙多くの場合に於て決して錢のことを考へてゐないで計算單位貨幣のことを考へてゐる。吾人は其れが錢の形を取ることには全く没交渉に數的に一の額をマルクに於て總括する。獨逸國民は戰時公債に五百億マルク以上を集め

た。其内の幾何が凡ての銀行券及び貸附金庫證券を含めて正金で拂込まれるだらうか。

それ故に貨幣單位、計算單位が國々の經濟の内部のみならず交換流通に於ても貨幣其物よりもズツト大きな働きをした。流通の最大部分は單なる計算要具たる貨幣で支拂はれずに計算せられる。此の計算要具貨幣は錢貨幣及びそれと呼ばれる「章券的」支拂要具とは元より區別すべきものである。そして吾人は計算要具の價值即ちその通用は錢の價值に基くものであると主張することは出来ない。計算要具貨幣はそれ自ら交換流通に於て自己の營利經濟の生産物に對して交換して得らるゝ様な一時的なる特殊の愛好をもつ商品ではなく、寧ろ、それを以て購ひ得べき財總體に對する法律上の意味ではなく最も一般的なる單に計算的の指圖である。計算單位の斯の如き「職能」は全く其一般的使用に基くもので又其價值は(後に説明する通り)此計算單位の一般的使用に基いて生産し得べき財によつて

左右される。斯の如き計算單位は一定の購買力をもつて即ち、其單位に於て現はさるゝ價格を以て嘗ては歴史的に發展して來たものであるがこれが全交換流通のための根底である。一と度び價格及び所得が此計算單位に於て構成された曉には幾何の正貨及び特に貴金屬が現實に存在するかと云ふことによつて尠しも影響を被るものではない。

$\times \times \times \times \times \times \times \times \times$

吾人は今一度、評價せられたる素材から全く遊離したる斯の如き計算單位の交換流通全體の手段としての可能性は何に基くものであるかの問題に歸る。吾人は今は最早や其可能性は「各人が貨幣を受取る」といふ信認に基くと云ひ得ない、何となれば其際最早や一物も受授されるのでないから。寧ろ吾人は斯の如き計算單位を交換流通に於ける凡ゆる要求權及び支拂のための根底として使用し得る可能性はそれが一般に價格の確立、及び所得の計算に使はれると云

ふ事實に基くものであると云はねばならぬ。確かに初めはたゞ各人が喜んで受取る様な一般的に好まれる使用財に就て此事が可能であつた。

然し乍ら凡ての價格及所得がそれで表現せられ且つ萬人がそれで計算する様な、一般的交換要具となつた以後は流通を完了するために尙ほ眞の現實の支拂要具を必要とするが如きことは愈々稀となるが其場合に於ても計算單位が如何なる

素材で體現せられてゐるか云ふことは全く問題とはならぬ。吾人は最早一般に貨幣表現についてはそれが現實の支拂要具に體現せられてゐることを考へない、寧ろ、先づ所得によつて換言すれば貨幣のために出來た營利經濟と消費經濟の分離によつて齎された處の全く抽象的の購買力のことを考へてゐる。經濟することは、貨幣所得を費用として使ふことで其利用及費用比較の計算要具として常に本位貨幣的單位を必要とする。經濟で此比較の出來るのは、幾分でも需用財の従前の價格を知つてゐる時ばかりであ

る。然し乍ら此價格は一般的交換要具の使用に基いて徐々に出來上つて來たもので、吾人が曩の論述に於て説明した様な複雑な方法で消費經濟の利用及費用の比較に歸着するのである。斯の如く所得が、貨幣單位に於て表現せられたる可なり完全に認めらるゝ費用額として現はれると云ふことから今日の交換流通に於ける貨幣の純計算的の考へ方が發達して來た。

交換要具が價格となり、即ち、詳しく謂へば凡ゆる經濟主體が凡ゆる財に對して有する總體の慾望に基いて其内の各人が個々の財に對して使はねばならぬ費用に對する統一したる計算となる位一般的に使はれるに至れば交換要具は凡ゆる消費經濟の利用及費用比較に於ける計算單位即ち一般的稱呼として使はれる。そして、これによつて初めて交換要具が一般的交換要具即ち貨幣となる。

歴史的に其處まで來るには元より國家の助力なしには不可能であつたらう。此事はこれ以上

確に言はない方がよい。當初、國家は其頃から貨幣經濟的交換流通に於て何時でも重要な役目を演じた國家の支拂及國家への支拂のために自らの手で貨幣素材を決定して、計算單位としての此の固有の意味に於ける貨幣の發展のためにも効驗したらしい。當時國家のみは從來使用せられて居つた交換要具及支拂要具のみを固執することが出來た、そして、國家が紙幣本位を採用する時でも常に從來存在する「貨幣」即ち既に民衆化した計算單位から離れない。此計算單位を國家は創造することは出來ない、殊に鑄貨制度の創造、異なる素材からなる個々の錢相互の間に確固たる關係を有する貨幣系統の創造も亦固有の貨幣、即ち計算單位の發展に對してはこれ迄考へられた様な意味をもつものではない。何となれば貴金屬が秤量されるだけの時でもこれ亦其成立を先づ國家に負ふのではあるが苟くも統一した度量衡制度さへ存在すれば、重量單位だけで呼ぶ一般的計算單位が成り立ち得るか

らである。此事は昔から重量的名稱をもつ數多の貨幣計算單位、今日でもパウンドスターリングの如き單位が證明してゐる。

## 一、貨幣の概念

この計算要具、此れで消費經濟が其費用を、又營利經濟が其利用及び費用を算定し、此れで交換流通の際に價格が表現せられ、其價格に所得が附纏い、其所得がかくて再び消費のための根底となる、この計算要具はそれ故固有の意味に於ける貨幣とは全く異なるものである。その上用語例では貨幣と云ふ語を國家的支拂要具のことを少しも考へられない様な上述の意味で絶へず使つてゐる。貨幣と云ふ概念の斯く曖昧なるがために貨幣論は今に至るも尙ほ金屬主義的見解から脱しなかつた。若し世人が例へば正貨が愈々其活動範圍を狭めつゝある凡ての銀行業務に於て其根底となるが如き、交換流通に於ける抽象的計算單位に對して特殊の言葉を持つて居つたならば恐らくは久しき以前より貨幣の本

質を一層正しく認め且つ又其殆んど凡てが貨幣と關連する經濟學說上の此他の多數の誤謬をも避けることが出來たであらう。

或る場合には固有の「地金」貨幣と對立せしめて、國家が發行したか或は國家が裁可（銀行紙幣）したる現實の支拂要具即ち交換流通の媒介者としての單なる計算單位を本位と呼ぶことがある。然し乍ら今日の貨幣論では本位と云ふ場合には他の何者かを指すもので即ち計算單位とは正反對に貨幣制度と國家との密接なる關係、如何なる貨幣素材が一般に認められねばならぬか、従つて金本位か銀本位か紙幣本位かに關する國家の決定を謂ふのである。

しかしマルク本位、フラン本位、クローネ本位等の如き表現も亦行はれる。が此れ亦常に國家的に創られたる現實の支拂要具に固着してゐるもので、決して交換流通に於ける凡ゆる取引の介者及び凡ゆる所得の基礎としての抽象的計算單位の思想を含むものではない。

抽象的計算單位が今日、凡ゆる取引を媒介し且つ單獨經濟に於て評價せられると云ふ事實に對して若しある特殊の表現を強いて欲するならば、恐らくは此計算單位を傳來的の意味に於て「稱呼」と呼ぶが適當であらう。何となれば消費經濟に於て所得として慾望に對する費用の分配のために一般的稱呼たることが即ち斯の如き計算單位の職能であるからである。そして、總體の交換流通に於ても亦此計算單位は凡ゆる單獨經濟の利用及費用の比較から起る凡ゆる價格を呼ぶに用ゆる一般的稱呼である。

更に又、若し鑄貨と云ふ表現を單に鑄造せられたる者に限らず印刷せられたる即ち亦「刻印」せられたる國家的支拂要具に就ても使用し得べしとせば、逆に一般的受領承認の思想を含める貨幣と云ふ一般的概念を吾人が今日貨幣に就て云々する多くの場合に於て念頭に浮んでくる抽象的計算單位に對して保留し得る譯である。斯くする時は舊來の貨幣論の大なる誤謬は極め

て容易に避け得られる。然し乍ら、吾人は用語例を變更することは出来ないから、たゞこれだけの實情を明かにして置かねばならぬ。即ち貨幣と云ふ語にて極めて雑多の事物を云ひ現はすこと、其中で抽象的計算單位と云ふ思想は比較にならぬ程重要なものであること、其抽象的性質のために常に充分注意を拂はれて居らぬこと之れである。

貨幣の斯の如き「抽象的」見解は吾人の純心理的經濟理論の所産である。蓋し吾人の經濟理論は貨幣に對しても亦適用すべきものであり且つ丁度此點に於ても舊來の數量的唯物論的經濟思想とは全く相反するものであるから貨幣論の特殊問題に對して更に如何なる斷案をこれより導くべきものなりやは、元より十分完全ではないが、次の諸章に於て説明する筈である。本章に於ては尙、二三の一般的問題即ち先づ貨幣の概念及び定義を述べる。

或る人々は固有の貨幣を貨幣代物及び私的流

通要具から限定するため殊に又、銀行紙幣は貨幣なりや否やの問題を決定するために大なる思索と手數とを費した。斯の如き試みは其人々が今日に於て漸く悟るに至りし如く貨幣の二重概念詳言すれば極めて大多數の場合に於て貨幣と云ふ言葉は用語例に於て決して素材的に存在する鑄貨或は證書を指すのでなく思想的なる純抽象的の計算單位即ち、單純なる「稱呼」を指すと云ふ事實を前にしては所詮無用の業である。今や吾々の此説明から金屬主義貨幣論に對して、及びそれ以上唯物論的經濟思想全體に對して重要な事實が明かに生れて來る。即ち大多數の場合に用語例にて解せらるゝが如き貨幣概念は物的に定義せられ得べからざるものであると云ふこと之れである。

吾人の見解を舊來の見解と對立せしめんが爲めに通常の貨幣の定義の内二つだけを紹介して見る。ヘルフェリツヒ（「貨幣」第二版、二二〇頁）は貨幣とは「經濟的個々人の間の流通（或は

價値の移轉)を媒介すべき……正常なる規定を持つ處の客體の總體」であると云ふ。そして最近モールは次の如き定義によつて貨幣の學理を促進し得るものと信じてゐる。「國家或は發券銀行から發行せられたる若くは尠くとも國家領域内にて一般に命名せられ或は刻印せられそして當時は更に財の流通の媒介者として使用せらるゝ處の動的の客體物件」「貨幣の論理」一九一六(二四頁)元より流通及び媒介と云ふ表現が餘りに一般的にして且つ不確定であることは論外とするも尙此二つの定義に就ては根本思想が既に誤つてゐる。即ち最も屢々用ひらるゝ用語列に於て且つ現象の固有の本質に觸れる用語列に於て見るに貨幣は決して客體ではない。若し吾人が國家的或は素材的交換器具のみを貨幣なりと考へるなれば交換流通に於ける貨幣の機能を正當に認識する事は決して出来ないであらう。

他方に於てクナップの後繼者達例はベネデクセン「本位政策及貨幣理論」(一九一六)「貨幣は

價値象徴にして價値對象にあらず」(一〇二頁)と主張してゐるのは私の「純主觀的價値論」(正確に言へば利用及費用論)の立場から見ても均しく又間違つてゐる。何となればそれとは正反對に貨幣は一個の價値づけの對象であるが斯の如き價値づけの象徴ではないからである。蓋し價値づけの象徴即ち主觀的評價に對する客觀的表現なるものは存在しないからである。吾人は此點に於て今一度不明瞭にして曖昧なる概念が如何ばかりの役目を演ずるかを知ることが出来る。思ふに平凡なる價値論の存在すること並に正しき價格論の存在しないことは、此等の誤謬のためである。

經濟理論に於て缺くべからざる一般的計算單位としての貨幣と云ふ經濟的概念は經濟生活に於て最も頻繁に貨幣と云ふ言葉と關聯したる意味を現はすが故に之れと法律的の貨幣概念とは區別すべきものである。經濟生活の幾多の概念例へば株式會社、組合、信用、が經濟理論に於

て今尙法律の意味にて用ひられ然らずとするも法律的意义によつて強く影響を被つてゐる如くに、貨幣に就ても亦其通りである。これ法律はたとへ屢々極めて部分的なりとは云へ經濟生活に制約的に干渉を及ぼしたからである。然もクナップは斯の如き貨幣の法律の見解を經濟理論に於て極度に撤せしめたものである。法律的には吾人も貨幣を元より素材的ではないが恐らく物的には國家が一般的支拂要具として宣言した凡ゆる物であると定義することが出来る。しながら進歩したる法律の理論に對しても亦單なる國家の宣言的行爲のみに止らず一般的計算單位なる經濟的思想が果して無意味のものであるか何うか、これについては此處には研究すべき筈ではない。

斯の如き稱呼、即ち斯の如き抽象的計算單位に對してはクナップの見解の正反對が正しいことは吾人の以上の説明から明かである。貨幣から斯の如き抽象的計算單位が出来ることは國

家の手によつて行はれ得るものではない。之れは決して「法律制度の所産」ではない。寧ろ國家が從來の貨幣歴史の間に貨幣制度に絶へず干渉する事によつて斯の如き抽象的計算單位の勃興即ち國家の創造物たりし貨幣から假りに斯く謂ふことを許さるゝならば「稱呼」への發展を防げるために其爲し得る限りを爲したのである。

(註) 斯うして貨幣に關する從來の物的見解に對する只「無」の根據及びクナップの理論に對する根據も亦、國家によつて採用せらるゝ物的支拂要具の變遷が時には一般的計算單位の評價及び價格をも變動せしむる事實に存する。

クナップは人々が一般に唯物論の見解を以て説明することの出来なかつた貨幣制度の多くの部分的問題をも確かに正しく觀察はしたけれども彼れの見解の根據即ち「貨幣國定説」は全く非經濟的のものとして確かに拋棄すべきものである。恐らく此範圍に於ても亦貨幣を先づ法律制度の創造物と見做し之れを單に國家的制度として認めたる數百年來の見解が、近代の貨幣思想に對して地盤が熟するに至る迄はクナップが初めて成し遂げた如く一度は徹底的に高潮せらるべ

き等であつたのである。そして、常の通り此點に於ても亦經濟的理論が極めて遅れて經濟生活の實狀に追隨したのである。既に久しく國家的制度としての貨幣の意義は捨てられてゐるが、此關係を極度に徹底せしめた「貨幣國定説」は既に其説が以上の意味に於て最早や久しく従前程眞理でなくなつた際に初めて打樹てられたのである。確かに、貨幣量が財を買つた事は一度もない、常にそれは所得であつた。又價格が貨幣量によつて決定されたことは一度もなかつた、常にそれは所得によつてであつた。又昔から單獨經濟者の熟慮は決して分配せられし貨幣量と關係を持つて居つたことはない、常にそれは國家的計算單位にて表現せられし所得との關係から生れて來た。のみならず經濟理論は經濟生活の實際の機構を理解すべき其任務を果すべき者であるから私的の支拂方法及び勘定方法の甚しき増加と共に理論上に於ても到底之を無視すべからざる發展が初めて起つて來た。此發展は更に

進んで流通要具に對する需用の満足を出来る限り流通其れ自體によつて掌らしめ、又主として日常の小流通のためにのみ國家的支拂要具を使用せしめ、此れによつて、國家的干涉から出来る限り獨立せる尠くとも貨幣の側からは確定不動の計算單位を創るに至るものである。

貨幣制度の發展は——此事を從來は十分認めなかつた、そして貨幣政策に際しても十分其促進を計らなかつた——抽象的私的なる裏書方法及び勘定方法によつて現實の國家的流通要具を益々廣く補足すると云ふ方向に進む。此發展は元より現實の貨幣を決して全く驅逐する事は出來ないが然し現實の貨幣の意義は次第に減じ殊に素材價値をもつ貨幣は愈々餘分のものとなつて來る。今日既に凡ゆる所得をそれで計算し、眞實凡ゆる價格がそれに基づいてゐる處の抽象的計算單位は愈々大なる範圍に於て凡ゆる價格の支拂のために使はれるに至るであらう。此種の發展は貨幣制度が國家の氣儘から解放されて交

換流通の要求そのものと關係を持つに至ることを意味している。そして此發展の目標は流通がそれ自身から使用すべき流通要具及び流通方法を創り出すに至つて到達せられる。此れが私的な支拂要具及び勘定要具の全き發展の最終目的である。此發展たるや既に述べたる通り、決して現實の貨幣を全く不用のものとはしないが其形態及び數量の交換流通に對する意義を愈々減少せしめるものである。既に今日此私的勘定方法が流通の媒介として廣き範圍に亘つて用ひられてゐるために計算單位の購買力は國家的貨幣操縱に對して從來に比して著く獨立的で且つ抵抗力をもつてゐる。

以上吾人の説明によつて私的流通方法及び勘定方法に對する「貨幣」の關係について何を云ふべきかは自ら解つて來る。然し此關係を説明する任務は今日の唯物論的數量的貨幣論に取つては極めて困難なことである。たとえ手形流通或は交互計算の方法によつて流通が媒介せられて

いることが確かであるにしても、之れを直に貨幣なりと呼ぶことは元より無意味である。然しながら此等のものは法律的な支拂要具の形態即ち舊來の學說の只一の「貨幣」で現はれずしてたゞ一般的抽象的計算單位で現はれる。舊來の學說に於ては貨幣の流通速度と云ふ名稱の下に此等のものを取扱つて居つた。人々は從來此流通速度なる概念を非常に輕視して居つたが、其存在及び容易に認め得る如く之れが貨幣論に於て有せざるべからざる特別の意義は貨幣の物的定義を以てしては貨幣論に於て處置し得ざること

を既に證明してゐる。單に「貨幣」のみならず、其「流通速度」も亦流通を媒介する。然し乍ら吾人の心理的經濟思想から發する處の經濟的機構に對する吾人の一層深き洞察の立場より見れば貨幣を交換要具或は流通要具と呼ぶことも亦た尙あまり唯物論的である。蓋し其際とても尙ほ客體のことばかりを考へ過ぎる嫌いがある、のみならずたとへ、此考方を避けて勘定方法を考

察に入れ従て幾分流通過程流通方法のことについて云々する場合でも且つ交換流通に於て存せずして却て交換流通に参加する單獨經濟の心に於て當然存する處の貨幣の最深奥なる本質を把握していいいからである。貨幣はいつでも凡ゆる交換要具の本質を構成する、一般的稱呼即ち費用單位の事實である。凡そ、交換に際して一つの要具を需用することは其要具が一般的のものであり、従てそれが貨幣の本質を包藏せる一般的計算單位てふ經濟內在的職能を持つ場合の外は意味がない、即ち斯の如き交換要具にて交換流通を容易ならしめ且つ之を擴充するのである。此故に凡ての經濟的現象と同じく貨幣も亦究極は個人主義的のみに説明せらるべきである。「國民經濟」から出發する凡ての考察は必然皮相の見に止らざるを得ない。若し人々が一般に凡ての經濟の本質はある心理的のものであると云ふことを正當に認識して居りさへすれば以上の事は明瞭になるべき筈である。